
月滅剣

絆創膏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月滅剣

【コード】

N8053H

【作者名】

絆創膏

【あらすじ】

世界は近未来平穏な世界に忍び寄る影、それは主人公の人生を変え、第一話は異世界にいる番人こと切符売りと主人公の会話

最悪の再会（前書き）

どこかで聞いた話だと思っただ方も再び読んでみてください。内容がまったく違います。完結まで長いので全部書けるかはわかりません。
（現代編でも手一杯）

最悪の再会

時、満ちるとき。日革まん。

我の左の月は晴天か、右の月は晴天か。

月の定め革まんとき再び3つの月現れん。

月滅剣（過去編）

ハアハアハア：俺は追われている（何にだ？）

獣か？いや、影だ。大きな影だ。

俺は悪夢から覚める。必ずな。

お前は誰だ？

お前は誰だ？

追われている中で俺は夜の街を失踪する

俺を追わないでくれ。

俺の通っていた幼稚園の隣に見知らぬ扉ができていた

中に入ったら最後だぞとばかりに扉の向こう

俺はその闇に一步踏み出す

切符売り『お客さん、ここより向こうはアンダーになります。よろ

しいか？貴君は

ベフリーの親善大使とせよと王の命令でございます。』

妙な服を着た男がそう言う。

？『そつちの2枚のカードはなんなんだ？』

切符売り『これは別のお客様の分であって高貴なあなた様には…っ

とおや？』

？『なんだよ』

切符売り『ちえーなんだよーどごそのねずみかよ。ここは異世界の

狭間だよ！！』

早々人間なんか来れる場所じゃないってのに』

？『俺は影から逃げてきたんだ』

切符売り『かげねえ…影ならあんたにも付いてるっしょ！……そう
ですね。わかってますって

最近、人間を襲うらしいからねえ…か、げ』

？『お願いだ、通してくれ影に追われるのは真っ平なんだ』

切符売り『影に追われるってのは普段から怖いことから逃げ出して
るってことだから

それに抗えばいいんですがねえ』

？『来た！！伏せる』

切符売り『伏せなくてもあつしは大丈夫ですぜ。お客さん、ここに
2枚のみすつぼらしい

カードがありますが、いります？』

？『カードって切符？』

切符売り『そうでげす、切符の代わりになるんでげすよ』

？『貸して！！』

俺はカードを手取る

切符売り『うりうりひげちよんぱ。えんがちよ。ここからはアランダ
ーワールド

となります。』

やじいじの出会い(前書き)

マリスはドラゴンボールの悟空的なキャラクターですかね。
女版悟空みたいな。

やじいしん出会い

2

切符？を手に取り俺はアンダーワールドに潜った
落ちたと言うよりも潜ったと言う感覚が正しい。水の中を潜るよう
な感じかな。

アンダーワールドの背景が踊るさなか俺の意識は朦朧としていた。

遅れたが自己紹介しよう。俺の名前は みつるぎ 御剣 すすむ 進
この物語の主人公だ。

そしてこのアンダーワールドという世界は異世界で、地球上に存在
する

もう一つの世界だ。

このアンダーワールドで俺の物語が始まる…

御剣『いててて…ん？ここは…』

視界に森が広がる。俺はこんな世界は知らない。周りの空気でわか
る…ここは

心に重い傘がかかるようだ。

重い空気が流れる。周りの景色もモノクローンのようだ。

御剣『そういえば誰かが言ってた…もう一つの世界があるって…俺
はそこへ

来てしまったのか』

森を少し散会すると階段があった。

俺は階段を降りる

じり…じり…となにかの気配がする左の森の辺りだ

俺は怖くなり階段を駆け下りた

後ろを向くとそこには…大きな熊がいた。

野生の熊と人間勝負は簡単に付く。俺には何より恐れがある。熊なんか勝てるわけがない。

御剣『こんなところでっ』

とつさに紡ぐ細い腕が黒い塊を貫く。

一瞬腕が伸びたのではないかというその腕は軽やかに獲物を捕らえその腕は

再び元の位置に戻る…

熊は低いうめき声を上げて倒れた。

御剣『女…』

あまりに美しいが故、つい言葉が出てしまったが熊を倒したのは女だった

御剣『あっあのさ』

女『なんだ』

御剣『今の、手品かなにかかい？』

強がりだとわかっていながらつい口に出てしまう

基本、ビビリではないのだ

女『拳法的一种だ。突きの一手だな。ところで少年、名前は？』

御剣『御剣だ。御剣進』

マリス『ミツルギススム？妙な名前だな。私の名前はマリス。この上の家に

住んでいる』

御剣『すまないが喉が渴いているんだ。上に行って水を飲ませて欲しいんだ』

マリス『ああ、不躰な家で悪いんだが…つとそのカードは！』

御剣『ああ、切符売りにもらったんだ』

マリス『私の叔父上が出した招待状ではないか！！小さい頃見たぞ御剣』
『そうなの？記憶力いいね』

こうしてマリスの家に行くことになった御剣、彼の運命とは？

マリスの魔法（前書き）

タイトルにある一定の意味を持たせてるんですが、難しすぎて変なタイトルになることが多いです

マリスの魔法

3

御剣『質素だねー』

そこには何も無い。生きるための最低限の道具しかない

御剣『マリスは女の子なのにお洒落とかしないのかい？』

御剣はマリスの外見が気になっていた。整った顔立ち凛とした表情に

マリスに一目ぼれしたのだ

マリスはきょんとした表情でさっき倒した熊を下に下ろした

マリス『今日は熊なべだ』

マリスは案外天然なのかもしれない

御剣『熊なべって、食べるのか…そいつ』

マリス『美味しいぞ』

そうなのか…そんなことよりもマリスのいろんなことが知りたい

御剣『マリスは一人なのか？』

マリス『そうよ。昔は爺と一緒にいたけど今は一人』

ちりちりと音がしてもわつと焼き焦げた煙が立つ

目が熱くなり涙がこぼれる

御剣『うわっ、なんだ？熊が焼かれて…火事だー』

マリス『大丈夫。もうすぐ旨いものができあがる』

旨いものって…女の子の料理としたらどうかと思うが

その日はマリスの家に一晩おかせてもらった

マリスは剣術家らしく月滅剣という剣を操るらしい

しかし、俺はそれより何気に彼女の使った魔法のほうが気になっていた

次の日俺とマリスは何気に自分の世界のことを話し合っていた
いい雰囲気になっていくかもしれない、マリスの表情も穏やかに見
える

マリス『御剣。お前月滅剣を学んでみるつもりはないか？私はここ
を離れられ

ないがお前なら外の世界にも通じていけるだろう、それにおいて強
くなることは

損じゃないと思うぞ』

俺は魔法がいいと言おうと思ったがやめた。マリスの意図はわから
ないが

月滅剣を覚えてみようと思った。その果てしない闇の鎖の運命に

修行死闘

7

マリス『御剣：いいか月滅剣というのは一子相伝である。故にお前には私から』

月滅剣のすべてを知ってもらうまずは私の血を直接飲んでもらう『
そういうとマリスは自らの手を切り血を木の？コップについだ。

そしてマリスは魔法で腕の傷を塞いだ

俺は自らマリスの血を飲んだ

マリスの血は鉄の味がした

マリス『初めは体力づくりからするべきといたいが：お前には実戦を最優先させる』

そう言ってマリスは木刀を俺に投げつけた。

マリス『さあ、かかってこい』

マリスに言われるがまま俺は動く。マリスは俺の力をあざ笑うように跳ね返した。

マリス『そんなものでは教える意味がないな』

マリスには隙というものがない。実は剣道を習っている俺でさえ

マリスの異様な殺気を感じる。剣先がぶれる感じ。

駄目だ。勝てない。

マリス『弱すぎて話しにならない。私の技は木刀とはいえ直撃したら死ぬぞ』

マリス『月滅槍！！』

剣をやりのように構えて突き出す。

くっ…辛うじて直撃はすんだが右足に痛みが走る
つうっ！！痛みは体中に走る。

マリス『月滅 演舞 6連！！』

美しく舞うマリスは蝶のように舞い6つの場所を攻撃する
うおおおお…

ばたと俺は倒れた。

…た

…た…て

みつ…た

御剣、立て！！立たんか！！

御剣が貢ぐ剣

8

御剣『くっ…調子に乗って。いくらなんでも…俺は有段者なんだ。そんな簡単に』

やられるか!!』

めまいがするが一瞬で気にしないようにした。

御剣『胴!!』

技を2回も出し隙だらけのマリスに胴をとろうとする。もちろん本気でだ

だが、御剣には剣気があっても殺気がなかった

御剣の一撃は軽くマリスにあしらわれてしまう

御剣『なんて俊敏性だ。化け物か!!』

その速さはまるで蜘蛛のようだ

御剣『とっておきは残しておきたいけどしかたない。くらえ!!』

俺はすばやい動きで面を2段打ちする。とっておきだ

マリスはそれを素手で受け止める

御剣『なっ』

マリスはその隙をついて俺の腹をひじ打ちする。

ぐふっ。口から血を吐き出す

御剣『まだだ、この程度で』

もしかしたら女だから負けたくないのかもしれない

でも、それでも戦っていてこんな充実した気分になれるだろうか

俺は月滅剣を極めてみせる

御剣『げ、月滅槍!!』

真似はしたものの技の切れは悪くまたもマリスに木刀をつかまれて

マリスに木刀を折られてしまう

御剣『だめだ…降参…』

そういう隙にマリスに思いつき蹴られてしまう。彼女の細い足から

は想像もできない蹴りが俺の体に何回も打ち付けられる
御剣『何も気絶するまでうちつけることはないだろう…』に

空前絶後の空戦

9

マリス『まあ初日はこんなものか。爺やが言ってた月滅剣伝授も中々難しそうじゃな』

はりぼてとなった御剣はマリスが運んでくれたおかげで今は布団で眠っている

マリス『中々できるのな。特に中々の根性だったぞ。ただし、まだお前には

月滅剣は使えない。』

御剣『マリスの血を飲んだのにか？』

マリス『まだお前にはそれほどのムーンエナジーは存在しない。』

ムーンエナジーとは月滅剣の力のようなもので俺はまだまだ未熟なようだ

御剣『まだまだ…なのか』

マリス『焦ることはあるまい。そのうちお前にも操れる時が来るだろう』

御剣『わかったよ』

内心焦っていたのかもしれないが、俺はますますその力が欲しくなった

次の日

昨日の痛みが残る中俺とマリスの稽古がはじまった

マリス『月滅剣！！』

御剣『月滅剣！！』

マリス『違う。お前はただ叫んでるだけでムーンエナジーが開放できてない

月滅剣のもつとも初期の技の月滅剣（技の名前）ができていなければ話にならんぞ』

御剣『そうは言われても俺にはこれが手一杯だ』

マリス『情けない奴！！だが、一日二日ではこれが限界か…
こんどはマリスに焦りが見える』

御剣『なんか手っ取り早く強くなる方法はないのか？』

マリス『いくつかあるが、ノーリスクなものはないぞ…これなんか
どうだ？』

マリスは俺の額に自らの額を合わせて

マリス『……………』

マリスから言葉にならない言葉が発せられる

マリス『覚醒せよ』

御剣『なっなんだ！！マリスツなにをしたっ体が解ける…』

俺の体は液体と化した。次の瞬間

御剣『月滅・神武・6連！！』

マリス『くっ、やる。だが、しかし！！月滅疾風剣！！』

御剣『ぐっぐげ、きかんなー月滅浸透剣！！』

マリス『な、何故月滅剣の奥義までつかえるのだ…しまった、まだ
御剣には

まじない武術は早かったか。とりあえずまじないをとかなければ』

マリスは自分が師匠に向いてないことに気づいた

その3日後

御剣『月滅剣！！月滅剣！！』

マリス『暫くはそればかりやってればいいよ』

最新の修行

10

御剣『月滅・演舞・6連!!』

6発の剣打がマリスへ放たれる

マリスはそれをすべて退け。

マリス『月滅翔!!』

御剣『グフツ』

吐血、しかし

御剣『月滅消炎波!!』

吐血でできた血溜まりを燃やした

マリス『やるねえ。だが、この温い炎ではな!!』

マリスさっきの炎からお前のムーンエナジーを計算すると…

マリスが計算機のようなものをもってくる

マリスが計算機のボタンを押すと計算機が光って

御剣『なんだこりゃ。ポラロイド写真か?』

ポラロイド写真には

HP56

MA36

と書いてある。ついでに俺の全身の写真もだ。

マリス『HPはお前の体力、MAはムーンエナジーの略だ。だいた

い今のMAで

月滅剣が8回ぐらい使えることになるな』

微妙だな…

マリス『お前の場合、かなりの割合ですべての技を着々とこなしているのが

逆に怖い…ん?これは!!』

御剣『なんだよマリス』

マリス『いや、なんでもない。(この数値、もしかして奴には呪わ

れし血が()
呪われし血とは。 次回に続く

コンピューター殺し

11

マリス『奴が覚醒したとき気づくべきだった。こいつはとんでもない暴れ馬だつて

ことを。こいつはおそらく（ムーンスロット 月滅剣という強さの段階のこと

ムーンスロットは1〜10までである）10以上の力がある。私の力で抑えられるか

わからん。しかし逆に言えば月滅剣をすべてマスターし、月人になれば

このアンダーワールドをも制覇できるかもしれんのだ』

御剣『マリスーなにごちゃごちゃ独り言言ってるんだ？

マリス『覚悟を決めるか』

御剣『おーい、マリス。一緒に団子でも食って…』

マリス『ええい、うるさい!!』

マリスは木刀を振るう

マリス『今日は修行の大晦日だ。今日ですべてを終わらせる』

御剣『なんだ急に』

マリス『うるさい、だまれ。今日ですべてを終わらせると言っているお前も木刀ではなく真剣を持って来い』

マリス『彼のものを覚醒させよ!!』

マリスと御剣が対決する

マリス 御剣

HP156 HP98

MA256 MA254

マリスの攻撃。マリス『月滅翔!!』御剣に36のダメージ

御剣の攻撃。御剣は爪を研いでいる
御剣は自然回復している18の回復

マリス 御剣

HP 156 HP 80

MA 256 MA 254

マリスの攻撃。マリス『月滅・演舞・6連』
クリーンヒット御剣に60のダメージ

御剣の攻撃。一瞬の闇の後御剣の爪が伸び地面にもぐり地中からマリスを捕らえた

マリスに90のダメージ

御剣は自然回復している18の回復

マリス 御剣

HP 66 HP 38

MA 256 MA 254

マリスの攻撃。御剣はひらりとかわした。

御剣の攻撃。御剣『グランドクロス!!』

マリスに70のダメージ

マリス『くつまさかこれほどは…マリスは膝をつく』

御剣『くつくくくつとんだへまをしたもんだな。俺をわざわざよんでくれてな』

御剣のもう一つの人格である俺を』

マリス『お前には死んでもらう。せいぜいあの世で叔父上に可愛がってもらえ』

(ブスッ) 剣がマリスを貫く。マリスは絶命した

ゆるぎない夢

12

くそう、くそう！！マリスめ、俺め！！俺は壁を叩く
何故マリスが死ななくてはいけなかったのか、何故殺したのが俺だ
ったのか

マリス…涙が沸く。虚しい叫び。うおおおおおおお！！俺が俺
がマリスを殺したんだー！！
ちつくしょう！！俺は崩れ去り疲れで眠った。

光 光

光 暗闇 光

光の中心に闇があり俺はその闇に飲まれていく…この闇がマリスを
殺したんだ

声が聞こえる。磨り減るような声で…

御剣よ…私の声が聞こえるか…聞こえたらうれしい…まだ、御剣君
が生きている証拠

だからな…御剣君にはこれから下に下りて欲しいのだ。マリスのた
めにも

おお、すまん。マリスの名を出すのは卑怯だな。だが、許して欲し
い私はマリス

の叔父だ。だからマリスの幸せを祈る代わりに、君の幸せを願うよ。
だから君に月滅剣を授けよう。基本的に月滅剣はマリスの墓標に飾
つてある

月滅剣はマリスと君が共用するんだ。もし、月滅剣が必要なときは、
天に向かって

好きな言葉を叫べばいい。

私が言いたいのはこれくらいだが理解してもらったかな。それでは私はこれで

すると、声がやみ、御剣は目を覚ます。

次の日。墓標には月滅剣とマリスの写真が飾られていた

つなぎ目ついで

12

山を降りる

マリスとの思い出が蘇る

涙が出る 怒りより先に

途中に熊に襲われたことがあったが、俺はこれを素手で倒し
山の入り口まで降りた

ここから先は右も左もわからないアンダーワールドである

俺はまっすぐ進む。北へ進むことは決めていた

森がある。森があってもズンズン進む。

やがて夜が来る。真っ暗だがまるで怖くない

心配！！どこだ！！

不意に明かりが辺りを包む

ジャック『不意打ちで勝つてもうれしくないんでな。明かりをつけ
させてもらった

俺の名前はジャック。このとおり盗賊をしている』

御剣『盗賊…やめておけ、今の俺は機嫌が悪いそれにお前からはた
いした力は

感じられない。すぐにゲームオーバーになるのはつまらないだろ？
ジャック『言ってくれるね大将。俺の力？んなもんは必要ないのさ

…』

ジャック『ここは俺のテリトリーだ』

御剣 ジャック

HP 452 HP 45

MA 45 ? 455

御剣の攻撃

ジャックはひらりとかわした

ジャックの攻撃…

ジャック『いけ！！森の住人たちよ』

ジャックがそういうと木の枝が生き物のように動き御剣を襲う

御剣に202のダメージ

御剣 ジャック

HP 250 HP 45

MA 45 MP 421

御剣の攻撃

やってくれたな！！だが！！

御剣『月滅疾風剣！！』

ジャックにかする

41のダメージ

御剣 ジャック

HP 250 HP 4

MA 24 MP 421

ジャックいたた…降参、降参

御剣『なんだ…もう終わりか…つまらないよお前』

ジャックはいきなり刷り込み土下座しながら

ジャック『師匠！！師匠にしてください是非！！』

御剣『師匠…師匠か…わかった』

マリスを思い出しながら御剣は弟子をとった

ほろびほろび

13

ジャック『駄目です。こつちにも人つ子一人いないです』

御剣『まいったな。あらかた潰したが村の一つでもあればな』

ジャック『仕方ないですよ。都心のベリーの街までいきましょうよ』

御剣『気が乗らないな。人が多いところは苦手なんだ。小さな群集地でもいいんだが』

ジャック『木に聞いたんですが、小さな村というのはないですが廃墟らしきところがあるところ。』

ジャックには木と会話できる能力がある

御剣『そこに行くか』

ジャック『こりゃあ駄目ですよ。完全に廃屋と化している』

御剣『駄目かな…まだ生き残りがいるはず…さがせ』

ジャック『まったく人使いが荒い人だ』

御剣『ここは教会だったみたいだな』

御剣が教会で見たのは小さな女の子だった

御剣『君はこの村の』

？『…ぬの』

御剣『え？』

？『死ぬの』

リリー『私はリリー。滅びの天使』

御剣『この子は何を言ってるんだ？滅びの天使？』

リリー『崇るの』

御剣『誰を？』

リリー『貴方の未来』

御剣『とにかくだ…こんなところにいたら危ないから、お兄さんと一緒に』

リリー『御剣！！ベリーの街まで後少しだぞ』

御剣『覚悟を決めないとな…』

リリー『その前にもう一回野宿か…』

ジエック『どうでもいいが腹減ったぜ』

リリー『話をそらさないで。野宿の時、私の事襲わないでよね。』

ジャック『だ、誰が！！てめーなんてたんなるガキじゃねーか』

リリー『だからよ。最近そいう大人がたくさんいるの』

御剣『煩いやつらだ』

その夜

リリー（トイレ…）

リリー『誰？』

ジャック『俺だ』

リリー『この馬鹿、証拠にもなく…ぶつ殺すわよ』

ジャック『俺の名前なんだっけ？』

リリー『ジャックでしょ？頭膿んでるの？』

偽者ジャック『なるほど俺の名前はジャックというのか』

御剣『リリーがいない。おいジャック…眠らされている…いや、魂が抜かれているんだ』

御剣『リリー！どこだージャック？お前は確かに眠らされて…』
偽者ジャック『なにを言ってるんだ俺はジャックだぜ…』

そこにはリリーの姿があった。眠らされているようだ

御剣『まさかジャックリリーを…』

偽者ジャック『始めまして。私の名前はジャック。性格には偽者ジ

エックとでも

名乗らせてもらいましょか」

御剣「偽者？あのジャックは……」

偽者ジャック「私が乗っ取りました。貴方は非常にうっとおしい。消えてもらいます」

御剣 偽者ジャック

HP 876 HP 1300

MA 75 MP 0

御剣の攻撃！！

偽者ジャックに45のダメージ

偽者ジャック「くくく…その程度ですか」

偽者ジャックの攻撃

御剣に200のダメージ

御剣 偽者ジャック

HP 676 1255

御剣の攻撃

偽者ジャックに55のダメージ

偽者ジエックの攻撃

御剣に315のダメージ

御剣 偽者ジャック

HP 361 1200

偽者ジャック『もう後がありませんよ』

御剣『くそっ木刀が折れた。こうなったら月滅剣を呼ぶしかない』

心穏やかにして、悲しみ怒り憎しみを絶ち

心の中にあるもっとも大事な言葉を…

御剣『マリーーース』

そう御剣が叫ぶと、御剣の天が割れその中から月滅剣が現れた
御剣はその剣を取った

御剣の攻撃

御剣『月滅剣!!』

偽者ジャックに1500のダメージ

御剣『ジャック!!大丈夫か?』

ジャック『御剣の旦那!!俺は一体…』

御剣『魂を抜かれたが体は大丈夫みたいだな』

リリー『私は逃げたけどね』

さてと…ベリーの村にいきますかな

ヤドヤドカリ(前書き)

普段の2倍くらいありますね

ヤドヤドカリ

16

御剣『こつちはだめか…』

ナツクのことをききだそうとする御剣だがなかなかいい情報が見つからなくて

四苦八苦していた。

リリー『こつちは駄目だよ。みんなナツクのこととなるとたんに弱腰になっちゃってさ

それほど悪名高いのかね。ナツクは』

御剣『そうでもないぞ。この辺りのナツクが腐ってるのもこの領地を統治する

ナツクのものが諸悪の根源らしい』

リリー『じゃあ、そいつを倒しちゃおう？』

御剣『必要ないさ…ジャックはなにをしているんだ』

その頃ジャックは

ジャック『ヘックシヨイ』

宿探しのためそこらを転々とするが、お金がなくて泊まる宿が見つからない

ジャック。そこでアル看板を見つける

『ちよこつとバイト』

なんだこの看板は。

店員『いらつしゃいませ』ちよこつとアルバイトへようこそ！…ここではちよこつと

働いただけでお金がもらえるちよこつとバイトです』

ジャック『金をとるのか？』

店員『いいえ、頂きません。そのかわりこの腕相撲マシンで腕相撲をしてもらいます

この腕相撲の耐久性がわかるように思いつきりやっってくださいね。

他にパンチングマシン

やホスト（ルックスいい人のみ）食品調味料の試食

ジャック『じゃあ、ホストで』

店員『じろ…貴方って頼りなさそうだけど顔はいいのね。合格!!』

（1時間後）

ジャック『準備できたぜ』

店員『じゃあさっそく接客してもらおうかしら』

おばさん『あら、新しい子?』

店員『はい、本日限りの子です』

おばさん『きゃープレミヤよーそのこお願い』

…3時間後

店員『はいバイト料3000マリアね』

ジャック『これがホスト…想像とは違って皆意外といい奴だったな』

御剣『遅いぞージャック』

リリー『ナニやってんだ』

ジャック『くそー俺の努力も知らないで』

その日は中々眠れなかった。ナックとは何なのか。マリス…おやすみ

（次の日）

御剣『おはよう!!』

リリー『随分機嫌がいいのね』

御剣『いい睡眠のとり方を覚えたのでな』

（好きな人を思い描けばいい）

ジャック『やれやれ…リリーと相部屋なんてとんでもないことする

よな』

リリー『私も文句の一つも言いたかったけど縄で縛り付けてやった

から』

ジャック『この人でなし!!人外!!』

リリー『うるさい。この優男。略してやさお』

ジャック『略すな!!』

御剣『ん…なんだ!!この馬鹿でかい殺気は…』

ケシ『頼もうーこの統治者ナツクのケシである。たのもう!!』

御剣『そんな殺気で…俺に何かようか?この宿泊客は俺達だけだぜ』

ケシ『随分自意識過剰だな』

御剣『なに!!』

ケシ『とはいっても凶星だからな、貴様昨日は俺の部下をかわいがって貰ったそうだな』

『

御剣『お前を倒してナツクの事をはかせてやる』

御剣

HP 1050

A 213

ケシ

HP 4300

PO

御剣の攻撃

月滅・竜王・猛追人!!

ケシに800のダメージ

ケシの攻撃

御剣に300のダメージ

御剣

HP 750

A 186

ケシ

HP 3800

MP 0

御剣の攻撃

月滅碎!!

ケシに1800の攻撃

ケシの攻撃

御剣に250のダメージ

御剣

HP 500

ケシ

HP 2000

AP 186

MP 0

御剣の攻撃

月滅剣三乗!!

ケシに800000214のダメージ

ケシを粉碎した

御剣『どうした?もう終わりか?』

ケシ『こっこうさんじゃ』

御剣『無様だな』

ケシ『あつあれひらがなしかしゃべれなくなって すすまんなったのことは

ひょうめんじょうのことならなんとか いまはしんきのへいしのほ

じゅうちゅうで ひー

御剣『貴様を切るつもりはない、だが暫く眠ってもらおうぞ』

御剣は魔法でケシを眠らせた

リリー『で、いくの?』

御剣『いくさ。そこになにがあるか見てみたい。なにより強そうな奴がたくさんいそうだからな』

ナツクに寝返り

リリー『でさ、御剣はどうやってナツクの場所を知るわけ？ケシは眠っちゃったし』

御剣『…』

ジャック『兄貴ってさ』

御剣『…』

ジャック『ひよつとしてすぐ馬鹿？』

御剣『ケシは眠らせないと暴れると思って』

リリー『御剣の馬鹿!!』

宿屋のおばさん『あんたたちナツクの本拠地に行きたいのかね？』

リリー『ん…そうだけど？』

宿屋のおばさん『それならもつと北にいかなくっちゃあいけないね。

寒いよ、あのあたりは』

ジャック『おばさんありがとう。俺達も準備しなくっちゃな』

リリー『私、マフラーが欲しい』

（服売り場）

ジャック『お、新作でてるじゃん』

リリー『靴なんて今のでいいじゃん』

ジャック『ああ、誰が金だすと思ってるんだ』

御剣『このコートをくれ』

…

ジャック『バイト料ほとんど使っちゃまったぜ』

御剣『防寒対策はこれでいいだろ。』

リリー『ナツク本部へゴー!!』

御剣『その前に余ったお金でラジオを買おう』

リリー『それで情報がわかるわけね』

くベリーの村付近

リリー『あーあ、これからまた野宿か』

御剣『仕方ないだろ。ナツクはここから結構あるんだ』

ジャック『でもさ、兄貴、ナツク本部に行つてどうするんだ？』

御剣『行つてから考えるさ』

リリー『計画性ないよ』

ジャック『どうでもいいけど俺達のことも忘れないでくれよ』

ナツクの本拠地に行く御剣一行。そこで何が待ち受けているのか

湿地帯の招待状

リリー『ああもう、うつとおしいなあ』

御剣一行の進む先には雑草が生い茂り行く手を阻む

ジャック『草だつて生きてるんだ。そうやつかむな』

リリー『じゃああなたがなんとかしなさいよ』

御剣『仕方ないな。先頭は俺でいい、草を慣らす』

リリー『御剣やつさしいー』

御剣『しょうがないやつだ。それにしてもこの辺りは誰もいないな』

ジャック『ここからは湿地帯だぜ』

リリー『底なし沼とかあるのかな？』

御剣『リリーはしゃぐなよ』

ジャック『湿地帯にはワニとか生息してるからリリーを守りながら
進まなくちゃいけないな。俺と御剣は遅れはとらないけどリリーは
違つたる』

リリー『…』

御剣『おぶつていくか』

リリー『いやよ』

ジャック『おこちゃまは文句言わない』

御剣『もうすぐ湿地帯だぞ』

結局リリーは御剣の案をのみ御剣におぶつてもらつ事になった

リリー『高いなー』

ジャック『さつきまであんなにいやがつてたのになー』

御剣『どうでもいいが、足をすくわれるなよジャック』

ジャック『あつしは大丈夫でさあ』

リリー『媚売ってるんじゃないわよ』

御剣『やれやれ…つとと足が!』

御剣の足が沈んでいく

御剣『しまった』

御剣はリリーを安全なところでおろした

ジャック『だんな!!』

ジャックが助けに入る

ジャック『無理だ…俺一人じゃ』

?『おこまりか?』

その声とともにジャックの隣に入り御剣を助けに入る

御剣『助かった。貴方の名前は?』

?『名乗るほどのものではないです。群れるのが嫌いな一匹狼といつたところです』

リリー『随分優しい一匹狼だわ』

?『では、私はこれで』

御剣達はナックの本拠地へと急ぐ

次回に続く

ナツクに名乗り出る

19

御剣『ナツクの本拠地…』

ジャック『御剣の旦那はどうしてナツクに拘るんで？』

御剣『ナツクにいけば依頼やら戦争やらで戦う機会が増えるからだ』

リリー『いやーん、凶暴』

御剣『そうでもないさ…月滅剣で一花咲かせるのはマリスの悲願だからな』

リリー『また、マリス？死んだ人間は生き返らないんだよ』

御剣『たとえ死んだとしても、その人間の成しえない夢を叶えなければいけないことだってあるんだよ』

ジャック『御剣さんは硬派だからなあ』

御剣『そんないいものじゃないさ…ただ自分が殺した師匠になんとしてお詫びと恩返し』

できるか考えることができるかいつもそのことばかり考えるんだ』

リリー『もお！！師匠の事になるとお喋りになるんだから』

ジャック『一丁前にやいてら』

リリー『あら悪い？』

ジャック『く…この、冗談で言ったのに！！』

リリー『御剣元気ない…』

ジャック『マリスの事を考えている時はいつもこうだよ』

御剣『ほんの少しの間だったけどマリスと話している時はとても幸せだったんだ』

リリー『はいはいわかりましたよ。あれ？検問やってる。なんだろう？』

ジャック『あー！！ナツクの本拠地だ』

ナツクの職員『お前ら、ナツクの試験を受けに着たのか？』

ジャック『そうです！！』

ナツクの職員『積荷をチエックさせてもらう。筋肉弛緩剤などはないな?』

ジャック『俺達がそんなもの持つてるわけがないでしょ』

リリー『そうだーそんなお金がない(泣き)』

御剣『ジャックは試験を受けるとしてリリーはどうする?』

ジャック『実戦のテストもあるぜ。やめとけばどうだ?』

リリー『私をなめないで。ささっ先に進むわよ』

試験官『えーこれよりナツクの隊員テストを始めます。まずはパーテストからです』

御剣『えっ!!パーテスト?』

リリー『試験だからパーテストは当たり前よ』

テストの結果:

御剣0点!!

ジャック55点

リリー100点!!

リリー『やிரいー』

御剣『(こつちの世界の字がわからなかった。)]』

ジエック『俺はまあまあかな』

次は実技。戦闘で結果を出さなければならぬ御剣はテストの結果を挽回できるか

リリーの理想論

リリー『実技は勝ち抜き方式の実践かー』

ジャック『くじ引きの結果は見てのとおりばらばらだ。決勝で俺と御剣が当たるんだな』

リリー『あらー私の間違いじゃないの。ジャックは私が切り裂いてあげる』

ジャック『切り裂きジャックを舐めるなよ』

御剣『強そうなのがいるな』

式『貴様か。ベリーの村で散々暴れた奴は』

御剣『あんななかなかやるらしいね』

式『中々だと…』

御剣『俺もまだまだ半人前だが、あんたは3分の1人前ぐらいかな』
式『小僧!』

リリー『おっさんもいちいち怒らない。御剣もすぐ相手に火をつけない!』

式『小娘がトーナメントでは先に当たるな。お前も粉々にしてやる』

司会者『さー代7回ナック主催オリジナル王者決定戦です』
第一試合は式選手とリリー選手です

ジャック『リリーも運がないよな。いきなりあのでかぶつとやるなんて』

リリー 式

HP 408

P 410

HP 1570

P 480

リリーの攻撃

グリーンソルト!!

式に480のダメージ

式の攻撃

焰の管！！

リリーは攻撃を跳ね返した
式に600のダメージ

リリー

HP 408

P 380

式

HP 480

P 450

リリーの攻撃

エメラルドソルト！！

式に400のダメージ

式の攻撃

粉骨爆砕波！！

リリーは2倍返しした

式に2000のダメージ

司会者『リリー選手の勝利確定です』

ジャック『次あいつと当たるのか…恐ろしいくらい怖いぞ』

御剣『式とあったが、ひよこ同然の弱さだったな』

リリー『御剣、勝った？』

御剣『でなければ土下座してた。』

ジャック『俺も勝ったぜ』

リリー『あんたはいいの。どうせ次私にやられるんだから』

次はリリーとジャックの戦い

波乱が起こる

リリー対ジャック理論

21

司会者『第二回戦リリー選手対ジャック選手です』

リリー『かつとばすぞーおー!!』

ジャック『俺はボールかなにかか?』

リリー『ぶちっといっっちゃうぞー!!』

ジャック リリー

HP 1500 HP 645

P 452 P 1582

ジャックの攻撃!!

リリーはひらりと身をかわした

リリーの攻撃

エメラルドソルト!!

ジャックに154のダメージ

ジャック『その程度の攻撃!!』

リリー『ノンノンノン…私の真の骨頂は』

ジャック リリー

HP 1356 HP 645

p 452 P 1545

ジャックの攻撃!!

リリーのカウンター

ジャックに600のダメージ

ジャック『く…』

リリー『あらもう終わり?』

ジャック

リリー

HP 756

HP 645

P 452

P 456

リリー『私の P が吸われている?』

ジャック

リリー

HP 1500

HP 645

P 452

P 456

ジャック『お前のカウンターを受けた時の傷で血に染まったる?そこから吸血植物に血を吸わせたのさ』

リリー『ふーん…結構やるんだ…じゃあ私も取って置きな』
スタージামソルト!!

ジャックに1499のダメージ

ジャック

HP 1

PO

リリー『ついでに P も吸わせてもらった』

ジャック『降参だ…』

リリー『さっーてと御ちゃんは』

御剣『月滅剣奥義月滅浸透剣!!』

サラダ『ぐあー』

司会者『サラダ選手…跡形もなく消え去りました。御剣選手の勝利です』

リリー『結構苦戦してたじゃん』

御剣『ナツクの6番隊隊長らしい』

後は決勝戦を残すのみとなったナツクのに試験合格できるのか？
ジャック『っーか、俺はアウト？』

御剣の目

22

リリー『御剣。悔いのない戦いにしよう』
御剣『ああ』

御剣

HP 2400

P 452

リリー

HP 620

P 1400

御剣の攻撃！！

御剣『月滅疾風剣！！』

リリーのカウンター！！

リリーのカウンターが暴走する

御剣に900のダメージ

リリーに400のダメージ

御剣

HP 1500

P 400

リリー

HP 220

P 1400

リリー『いったいわねーもう手加減しないから』

リリー『スターダスト！！』

御剣に1499のダメージ

御剣

HP 1

MP 400

リリー

HP 220

P 0

御剣は覚醒する

御剣の攻撃

御剣『月滅浸透剣!!』

リリーに2500のダメージ

司会者『決勝戦は御剣選手の勝利です』

リリー『びっくりした!!急に目がマジになるんだもの』

御剣『すまないなリリー覚醒を自分でコントロールしたかったんだ』

リリー『あたしで試したわけ?ひどーい!!』

御剣(これで覚醒しても大切なものを傷つけることはないだろ)

司会者『今回の戦いでベスト4になったものはすべてナツクに籍をおく事ができます』

ジャック『じゃ俺も入れるんだナツクに』

ナツクに無事入ることができた御剣、ナツクで待ち受けているものとは?

ナツクの志士並ぶ

23

：で俺は第7番隊に配属という訳だ
リリー『私とジャックは6番隊ね』

任務があるまで別名待機か

ナツクの構図

総大将

メーテ

副隊長

ククル

一番隊隊長 二番隊隊長 三番隊隊長 四番隊隊長 第五番隊隊長

第六番隊長 第七番隊長

任務中 任務中 クク ウイル フーケ

式 ケン

第七番隊作戦会議

ケン『今日は新入りの歓迎会をする』

御剣『御剣進だ。』

ケン『第七番隊は新参者に優しいぞ』

御剣『ならば俺を七番隊の隊長にしてくれ』

ケン『はっはっはっ！面白い冗談だ。』

御剣『冗談などではない！！』

七番隊隊員『冗談でなければなんだというのだ？』

七番隊隊員B『貴様！！斬られたいのか！！』

ケン『もうよい。御剣もいい加減頭を冷やせ。』

御剣『…すまぬ…！！』

ケン『む…！！』

御剣 ケン

HP 2045 HP 2500

MA 400 MP 500

御剣『月滅剣!!』ケンに700のダメージ
ケンの攻撃!!御剣に445のダメージ

御剣 ケン

HP 1600 HP 1800

MA 250 MP 500

御剣『月滅疾風剣!!』ケンに1800のダメージ

・
・
・

リリー『6番隊隊長渋かつこよかったー』

ジャック『リリーが副隊長…』

リリー『あつ御っちゃん!!』

御剣『七番隊隊長だつ!!』

リリー『ええーっ!!』

ケンに変わって七番隊隊長にのし上った御剣。
御剣に待ち受けているものとは!!

月滅剣番外編（前書き）

現在編の違う時代の月滅剣です。御剣がゼロ・パークティと名乗る話もいつか書いてみたいです。

月滅剣番外編

アナウンサー『ここ東京は先日現れた未確認飛行隊と共に現れた虫型機械生物に

よって選挙されてます。自衛隊は全滅、残された人々の安否が問われてます』

子供『ぐすっ』

アナウンサー『あんなところに子供が取り残されてます。これは大変です

ちよっと!!もう少し近寄れないの?』

?『邪魔だ、退け!!』

子供『!!』

アナウンサー『機械虫が粉々に。まるでスーパーマンだわ!!救世主があらわれました!!』

御剣『虫共は俺が片付けるからガキを頼む』

御剣『月滅：疾風剣!!』

跡形もなく消されていく機械虫達

アナウンサー『東京を魔の手から救っていただいております。ありがとうございます。貴方は救世主です!!』

御剣『俺は救世主でも正義の味方でもない』

- 3年前 -

御剣『エリーシステム?』

パークテイ博士『少女エリーの呪術を開放することによって人間にある異変を

起こすことができる、戦利権の特攻品じゃ』

御剣『(どういう効果が出るともわからずパークテイ博士のいのまま動くのはまずいな)』

パークテイ博士『それでお前にはエリーの世話係をしてほしいんだが』

- やれやれ結局どんなものかわからずエリーシステムは凍結された訳か -

- 現代 -

御剣『それでエリーシステムを動かすというのだな？上がよく納得したな』

エリーシステム - 少女エリーをコアとした呪術連動システム

世界の人口を半分にして心の綺麗な人間をそのまま心の醜い人間を石にする

システムだ

エリーシステムが稼動されてからは酷い世界がそこにはあった

例え心の醜い人間にも大事に思っている人は多く泣き叫ぶ人が後を耐えなかった

この数年で御剣進という名を捨て、ゼロ・パークテイと名乗っている俺はエリー

システムの解除を目的にサハラ砂漠にあるエリーシステムに向かうことにした

- エリーシステム -

ゼロ『古いIDが使えるといいが…』

ID157897

ピピッ

ゼロ『この際、鍵は無視しよう』
ビビィ

ゼロ『機械兵か！！』

バシューバシュー

ゼロの魔法で機械兵は消滅した

中央部分ここにエリーがいる

ゼロ『エリーシステムの中央部分…ここに忌まわしきものがある

俺の醜い過去そのものだ。それにエリーが汚されている現実が許せない』

エリーシステムを解除するとエリーは死ぬ

ゼロ『すまない。うらんでくれて構わないエリー』

エリー（何故悲しむのゼロ『育てておいて私は…私を恨んでくれていい』何故そんな

悲しいことをいうのゼロ『私は父親失格だな』私…幸せだったよ）

ゼロはエリーシステムを解除した。

こうして世界は再び栄えゼロは一人また新たなる脅威と戦う準備をする

人類は生き残ることができるのか？

御剣の貢物

24

御剣が無理に七番隊隊長になったのは、より激しい戦いを望んだからである

御剣の初めての仕事は、潜入捜査。アトレスカという舞蹈大会に乗り込む

御剣『で、なんでお前らがいるんだ』

リリー『へっへっへっ抜け出してみたよ』

ジャック『6番隊は非戦闘員で暇なんだよな。偵察とかばっかださ』

御剣『俺の仕事もたいした事はないよ』

リリー『舞蹈大会か：私、踊り上手だよ』

ジャック『嘘っ』

リリー『失礼ねー』

御剣『あんまり金もってないぞ』

リリー『電車賃くらいは持つてるわよ』

へーこつちの世界にも電車があるんだ

リリー『御剣、ジャック、置いてくわよー』

俺達はぎりぎり電車に間に合った

ここの電車は田舎のバス並みに停車数が少ないんだ

『待ちたまえ』

御剣達『えっ』

敵の奇襲か？

催涙ガスで眠りそうになる

御剣『マリーーイイス』

御剣『はっ！！』

手ごたえは…あった！！

御剣達はそこで眠った

・ ・ ・

…ここはどこだ？

大きな木の下で眠っていたようだ

リリー『起きた？ 目的地だよ。』

ジャック『俺がここまでおぶってきたんだぜ』

御剣『月滅剣がない!!』

ジャック・リリー『ええーっ』

月滅剣がない御剣は一体どうなる

次週に続く

オークションで億越え

アトレスカ舞踏会場 -

司会『レディースアンドジェントルメーンここはアトレスカ舞踏会場。今日は

この舞踏大会をお楽しみください。えーとその前にオークションがあります。

今日の一品は（普段この舞踏会場はオークション会場となっている）な、なんと

月滅剣です。あの由緒正しき、竹塔三月が打った月滅剣1式です。』

リリー『あー売られてる。月滅剣売られてる！！』

御剣『1式ということは一本以上あるのか月滅剣は…』

司会『では、1000万ギルドから』

競売者『1億ギルド！！』

競売者B『5億ギルド！！』

リリー『どうするの御剣。このままじゃまずいよ』

ジャック『ぶっこむか！！』

リリー『それじゃだめだよ』

競売者『100億ギルド！！』

競売者『1兆ギルド』

競売者『10兆ギルド』

観客席からおおーっという歓声と共に

司会『では、10兆ギルドでこちらのお客様に。なお、鞘からは抜かぬようお願いします』

鞘から抜くと本人の魂を抜いてしまうのです』

罵声『抜け。抜いて本性を見せてみる』

罵声『そうだ！！見世物にも飽き飽きしていたところだ。舞踏大会等どうでもいい』

リリー『今だ！！御剣』

御剣『はっ！！』

バリンと音がして照明が落ちると共に月滅剣は何者かに奪われた
ジャック『追っ手はすべて片付けたぜ』

リリー『プププ…何が片付けただ！！ジャックのかっこつけ！！』

御剣『月滅剣…心配かけやがって』

リリー『御剣…やばい人になってるよ』

御剣『マリス…』

リリー、ジャック『あーそういうことかー。』

オークションで億越え（後書き）

この話、初めナツクの隊員が月滅剣を落とすところから話が膨らむ展開だったのですが、面倒くさいので御剣達に盗ませることにしました。というか元々御剣のものなので盗みにはなりませんよね。

御剣の間

25

リリー『もーまた偵察任務かあ』

ジャック『いい加減飽きたよなあでもそれも6番隊の…』

御剣『あ、ちょうどいいところに。お前らに話がある』

リリー『ええーっしばらく会えなくなるうう？』

御剣『ああ、しばらくはパークテイ研究所に勤める事になるんでな』

ジャック『なんだ？そのパークテイ…』

御剣『ああ、ナツクの兵器を作っているところで、まあ死の商人と
いうところだ』

リリー『やだー!!』

ジャック『じたばたしてガキじゃねーんだからなあ』

御剣『たくもう仕方ないだろ。』

御剣『じゃあ行って来るからなあ』

ジャック『そんな急なのか？まあしかたないかあ』

リリー『私は認めないわよ』

御剣『どのぐらいで着く？』

ドライバー『20〜30分というところですかね』

御剣『意外と早かったな』

ドライバー『しかし、よろしかったのですか？』

御剣『なにが？』

ドライバー『可愛い弟子が二人もいらっしやるのでは』

御剣『ふ…言うな』

ドライバー『到着です。』

御剣『あれがパークテイ研究所…』

パークテイ博士『私が知りたいのは使えるか使えないかだ』

エリー『…』

ゼツ『そんな…エリーの事、物みたいに言うのやめてください』

エリー『…』

パークテイ博士『ゼツ。エリーは物じゃない。だが、人でもないのだ』

ゼツ『ツ！！』

ゼツがパークテイにビンタする

ゼツは走り去る

御剣『取り込み中悪いんだが、あんたがパークテイ博士か？』

パークテイ博士『そうだ。貴方がナツクから来た？』

御剣『御剣進だ。よろしく。』

エリーへ

パークテイ 研究所内

26

御剣 『なんだあーそれじゃあガキのお守りをしると？』

パークテイ博士 『ただの子供じゃない。』

御剣 『あんたさつき人間じゃないといったな… どのような事が教えてもらおうか…』

パークテイ博士 『呪術というのを知ってるか？』

御剣 『さあな』

パークテイ博士 『人を呪ってその人間達に不幸をもたらす術だ』

御剣 『それとその子供はどう関係するんだ』

パークテイ博士 『その子は巫女だ。そのことを媒体として呪術が完成する』

御剣 『人間じゃなかったらなんだ？』

パークテイ博士 『鬼だ』

御剣 『はあ？』

パークテイ博士 『悪魔だ。イメージするものはなんでもいい。イメージは悪ければ』

悪いほどいい。そのこは普通の人間だが、ただの人間では誰も恐れ
ないからな』

御剣 『酷い話だな。』

パークテイ博士 『それでいい… エリーのお守りが君の仕事だ。頼め
るかな？』

御剣 『ああ、だが貴様のためじゃない』

パークテイ博士 『せいぜいいきがるんだな』

パークテイ博士の印象は最初から最悪だった

エリー 『…』

御剣『もうすぐできるからな…オムライス』

エリー『…』

御剣『一言も話してくれないな。お守りすらできないとは我ながら情けない限りだな』

エリー『…』

御剣『一口ぐらい食べて欲しいな…』

エリー『ぱくっ』

御剣『どうだ？美味しいか？』

エリー『うん』

御剣『よかった。隠し味のコンソメが効いたかな』

- 数日後 -

御剣『エリーは今日も読書か…この膨大な数の本をすべて暗記して
るっていうんだから

すごいよな』

御剣はある本をとって見る

御剣『これは魔法書か…これは…ただし間のとりかた…これは拳
法百選』

随分攻撃的な本だな

エリー『…』

エリー『…』

エリー『殺す』

風が舞い上がり、雑とした空間が立ち上がる

本が引き裂かれ、紙になり、くずになる

エリー『悲しみを憎しみに愛を哀に』

御剣『エリー、やめろ』

エリー『殺す』

御剣

エリー

HP3050

HP1020

MA 1020

MP 504

エリーの攻撃

507のダメージ

御剣は身を守っている

エリーの攻撃

503のダメージ

御剣は身を守っている

エリーの攻撃

550のダメージ

御剣は身を守っている

エリーの攻撃

魔法拳法エリーダイブ

1300のダメージ

御剣

エリー

HP 190

HP 1020

MA 1020

MP 480

御剣『やめろ…エリー…!!』

エリー『御剣…』

御剣『エリー…!!』

エリー『殺して…!!』

御剣『っ…!!』

エリーをとめなければ…パークテイなら止められるか？

御剣『博士…!!』

パークテイ博士『御剣…!!エリーが暴走したと…!!』

御剣『どうすれば止められる』

パークテイ博士『知らんよ』

御剣『エリー！！聞こえるかエリー！！』

エリー『殺す…殺す…殺して…お願い！！』

御剣はエリーを抱きしめながら

御剣『殺せるかよ…殺せるかよー！！』

パークテイ博士『エリーが止まった…！！やはり用心棒を雇って
いて正解だったようだな』

エリーシステム…急がなければいけないな』

エリーシステムとは…次回に続く

パークテイ博士が白状

27

御剣『エリー、また本を読んでいるのか…』

昨日の暴走から一転、今日は大人しいみたいだが暴れたのも本のせいでは

ないのか

御剣『そんな単純なことでもないか』

エリーは大量の書物を見てその内容をコピーする

それはすばらしい力だけど

御剣『その使い方にもよるが』

エリー『パパ』

御剣『なんだい？』

エリーが俺に懐くようになってからパパなんてよばれて

俺は何やってるんだか

エリー『チキンライスが食べたい』

御剣『卵は嫌いかい？』

エリー『卵は命の源、食べられない』

こんな子が呪術を使うのか？

その呪術についてパークテイ博士に聞かなくてはいけないことがある

御剣『パークテイ博士！今日こそ聞かせてもらおうか』

パークテイ博士『何のことだ？』

御剣『エリーシステムの事だ』

パークテイ博士『腕を離せ。教えてやるよ。エリーシステムとは

世界の半分の人間を石に変えてしまうシステムだ。しかも、ただの半分

ではなく悪の心をもつものを石に変えるというきちんとした目的がある

システムだ。ただの兵器ではない。純然たる目的があるシステムだ。善の心を持つものがより平和な暮らしをするのには必要なシステムだ」

御剣「なにが純然たるだ。エリーをそんな事に使うな」

俺は世界を見ていなかった、だからエリーのことが頭から離れなかった

パークテイ博士「エリーシステムが発動されて私の心がもし汚れていたら私も石になるんだもちろんお前もな」
漠然とした空気が流れていた

最前列の祭殿

目が覚める

御剣『夢か…』

パークテイ博士に会わなくては

パークテイ博士『どうだ？あれは上手く働いているか？』

御剣『上手く働いているか？』

パークテイ博士『食って、寝て』

御剣『ああ』

パークテイ博士『まだ納得がいかないか？』

御剣『彼女をモルモットにするのは反対だ！！聞いてくれるのか？』

パークテイ博士『まさか…ナックにも貴公の名は轟いているとはい

え…』

御剣『勝手はできないということか』

パークテイ研究所・旧棟・

御剣『ここは、モルモットの大群だな』

パークテイ博士『試験官ベイビーにタネンだ』

御剣『タネン？』

パークテイ博士『髪の毛や皮膚など人間の種から新たなる人間を生ま出す
方法のことだ』

御剣『もう少し観て行ってもいいか？』

パークテイ博士『私は用があるので戻る』

パークテイ博士は去っていった

御剣『すごいものだな…なんだ？鳥肌が立っている。あつちか…』

御剣『階段が…』

俺は階段を上がっていく次第に息が荒れていく…その先になにかあ

るのか

次回に続く

ゼロの最初

29

目の前の扉の色が赤いか青いかなんてどうでもいい
俺の目の前に扉があるから入るだけだ！！
扉を開けて後悔するのは今日だけでいい

御剣「…」

御剣「…」

御剣「…」

御剣がたくさんいた。

御剣「うわあああああああ！！」

御剣はたくさんいて笑ったり泣いたりピーしたりバキューンしたり
していた

69

パークティ博士「もう奴は用済みだな。」

ドカアアアンと音がして旧棟が崩落した

御剣「助けてくれ…」

はっ

崩れ去った旧棟で瓦礫がパラパラ落ちるさなか
ある人が俺を助けてくれた。

それは俺のクローンだった
助けてくれたクローンの方は傷が酷い

御剣クローン『よかった。君が無事で』

御剣『大丈夫か？』

御剣クローン『ううん。僕の方はもう駄目みたい……』

御剣『そんな…そうだ！！パークティ博士のところに行こう。あそこなら

君を治してくれる』

御剣クローン『いいんだ…ほんとに…それより僕の願いを聞いてくれないか？』

御剣『ああ』

御剣クローン『僕はこの世に生まれてきたにもかかわらず、何もなさないまま

なにも残さないままこの世を去らなくてはならない。それがたまたまなく

嫌だ。だから僕の名前だけでもこの世に残したい。』

御剣『お前の名は？』

御剣クローン『え？』

御剣『お前の名は？』

ゼロ・パークティ『ゼロ・パークティ。ここの研究所のプロトタイプなんだ』

御剣『わかった。今日から俺の名前はゼロ・パークティだ』

ゼロ・パークティ『え？』

御剣『それならばこの世に名が残る』

ゼロ・パークティ『ありがとう。ほんとに』

こうしてゼロ・パークティは笑顔でこの世を去る

次週は決着エリーシステム

さよならエリー（前書き）

題名の縛りはやめにしました

実は今までタイトルは全て

最悪の再会のように

頭文字をそろえるようにしてたんですが

最悪のさと再会のさとが

この場合さしすせそのSで揃えるようにしてたんです

だから変なタイトルが多いのでこれからはもっと魅力的なタイトルで勝負します

さよならエリー

30

パークテイ博士「それでゼロ・パークテイと名乗るようになるの？」

ゼロ・パークテイ「そうだ」

パークテイ博士「両親からもらった名前をそうやすやすと変えるものではないな」

ゼロ・パークテイ「それはそうだが」

パークテイ博士「まあいい。それでエリーの件だが…あしたシステムに組み込む

つもりだ」

ゼロ・パークテイ「そうか…」

エリー「私はどうなるの？」

ゼロ・パークテイ「星になるのさ」

エリー「星に？」

ゼロ・パークテイ「そうだ。星になって自由になるんだ」

エリー「素敵…！」

ゼロ・パークテイ「そうさ」

研究員「エリーシステム。コア、スタンバイ」

エリー「御剣…！御剣…！」

ゼロ・パークテイ「心配ないよ。エリー」

エリー「…」

研究員「システム全クリア。局長…！おめでとうございます…！」
パークテイ博士「システム完成か」

夜 -

パークテイ博士『もういくのか？』

ゼロ・パークテイ『俺の役目は終わった』

パークテイ博士『怒ってはいないか？』

ゼロ・パークテイ『いや…』

ゼロ・パークテイ『さよならエリー次¹に会う時はシステムを止める
時だな』

パークティの帰還

31

リリー『隊長が帰ってくるって?』

ジャック『ああ、確か今日だ』

リリー『どれどれ…ゼロ・パークティ? 誰これ? 御剣じゃないじゃん』

ゼロ・パークティ『…』

リリー『ああああああ!! 隊長だ!! おーい!!』

ジャック『で、改名したと』

リリー『気持ちはわかるけど、名前まで引き継ぐ事なかったんじゃないの?』

ジャック『これからはゼロだな』

リリー『私はパークティって呼ぼうかな』

ゼロ・パークティ『好きにすればいいさ』

リリー『つれないな』

ジャック『もう忘れてるかもしれないからもう一回張っておくけど』

総大将

メーテ

副隊長

ククル

一番隊隊長 二番隊隊長 三番隊隊長 四番隊隊長 第五番隊隊長

第六番隊長 第七番隊長

任務中

任務中

クク

ウィル

フーケ

式

ゼロ

リリー『ってあるけど一番と二番隊の隊長が行方不明なんだよね』
ジャック『それで俺達は二人の任務の後を継がなくてはいけないんだ』

それでゼロもどうかなくて』

リリー『私達二人じゃマジやばいって感じだしー』

ジャック『おいおい、隊長と一緒にだからってはいしゃくなよ』

ゼロ『隊長？』

リリー『私達七番隊に加えてもらえないかな？』

ゼロ『お前らじゃ力不足だ』

リリー『そんなことないもん』

ジャック『確かにそうかもしれないな』

クク『おやおや：御剣さん。パークティ研究所から帰ってきたのかい』

リリー『クク先輩』

クク『私の事はクク隊長、またはクク大佐と呼びなさいと言っているのに：仕方ありませんね』

ゼロ『何か用ですか？』

クク『舞踏会での窃盗容疑を差し引いても貴方の大尉という立場はやや過小評価』

というもの。昇格の話が出てますよ』

ゼロ『興味が無い話だ』

クク『ではそのように上に伝えておきます』

ゼロ『ところで一番隊、二番隊長の任務の引継ぎの件だが』

クク『そのことですか：気をつけなさい一番隊と二番隊長が二人がかりでも』

苦戦した任務です。一番隊長はナックでも最強だった人、その人がパートナー』

に二番隊長を引き連れても解決できなかった難事件です。危ないと感じたら』

引き返すですよ』

ゼロ『はい』

二人の英雄を苦戦させた任務とは？

試練の谷（前書き）

ドログロイは蛇型のモンスターです

試練の谷

32

クク『三人には試練の谷に向かって貰いたい』

リリー『試練の谷?』

クク『ここから西に向かったところにある霧の深い谷だ。先に先遣隊を

向かわせている』

ジャック『ドログロイか...』

リリー『なんか言った?』

ジャック『その谷にいるモンスターだよ。もしかして二人を殺ったのは』

クク『そんな雑魚にやられる人たちじゃあないさ。でも、注意してくれ

とくにパークティ大尉にはな』

ゼロ『わかってる。お守りをやれっていうんでしょ?』

クク『よくわかってる。助かる』

リリー『失礼な。ジャックはともかく私は一人の女としてみて欲しいです』

ジャック『おいおい』

ゼロ『試練の谷に向かうぞ』

リリー『試練の谷は遠いの?』

ゼロ『一人だと走った方が速いんだけど、お前らが一緒だから馬車を使う』

リリー『一キロメートルどのくらい?』

ゼロ『10秒あれば』

リリー『空を飛ぶの?』

ゼロ『浮くんだよ。超低空で』

ジャック『見る見る人間離れしていくな、ゼロ』

ゼロ『しっ』

ゼロ『サソリだ』

リリー『きゃー!!とつてえー』

ゼロ『お前じゃない。馬鹿っ』

ジャック『ウツ!!』

ゼロ『まずい。解毒なんてできないぞ。とりあえず町まで運ばっ
リリー『ここからならフレリカの町があるよ』

- 3日後 -

ジャック『う...』

リリー『ジャック大丈夫?』

ジャック『隊長は?』

リリー『一人で試練の谷に』

ジャック『そうか...』

リリー『結局お荷物になっちまったな』

- 試練の谷 -

兵士『パークテイ殿お待ちしていました』

ゼロ『ドログロイのほうは?』

兵士『それが...』

兵士は塵になって風に吹かれて消えた

ドログロイ『ギイー!!』

ゼロ ドログロイ

HP 10000 ????

MA 1520 19000

ゼロの攻撃 究極魔法

月滅剣奥義 風よ!!1500のダメージ

炎よ!!2500のダメージ

大地の怒り!!6000のダメージ

後に残るのは…闇だけ!!15000のダメージ

ドログロイの攻撃

『ぐっおあああ!!』

ゼロに2000のダメージ

ゼロ	ドログロイ
----	-------

HP 8000	???
---------	-----

MA 620	19000
--------	-------

ドログロイの先制!!

『しゅゆゆゆゆゆゆ!!』

ゼロに3500のダメージ

ゼロの攻撃

月滅・流舞・寡黙連!!

ドログロイの攻撃

ミスツゼロはダメージを受けない

ゼロ

ドログロイ

HP 15000

?????

MA 2600

19000

ドログロイの先制!!

ドログロイはゼロを締め上げた

ゼロは息ができない

ゼロに6000のダメージ

ゼロの攻撃

月滅浸透剣!!

ドログロイに68000のダメージ

ゼロ

ドログロイ

HP 9000

?????

MA 1400

19000

ドログロイの先制

ドログロイはゼロの首を絞めている

ゼロに6000のダメージ

ゼロは攻撃できない

ゼロ	ドログロイ
----	-------

HP	3000	???
----	------	-----

MA	1400	19000
----	------	-------

ドログロイの先制!!

リリー『そうはさせないわ!!』

ドログロイに140のダメージ

ジャック『切り裂きジャック華麗に参上!!』

ドログロイの首絞めを解いた

ゼロ『月滅剣!!』

ドログロイに50000のダメージ

ゼロ	ドログロイ
----	-------

HP	3000	68000
----	------	-------

MA	600	19000
----	-----	-------

ドログロイの先制!!

パークティーカーのカウンター!!

ドログロイに70000のダメージ

ドログロイを倒した

リリー『隊長!!!』

ゼロ『馬鹿か!!何故!!何故出てきた!!』

ジャック『話は後だ。毒霧が酷い』

リリー『いやー隊長結構危なかったよ』

ゼロ『るさいっ!!それにいつから俺は隊長になったんだ』

リリー『いまはそういたいであります!!』

ゼロ『つたく』

ジャック『ふーとりあえずなんとかなったなククさんに報告しなくてはいけないな』

とりあえずの休息だが、ゼロの冒険は続く

ファシーナで（前書き）

久々の更新です

ファシーナで

33

ゼロ『今日はパレードか』

クク『シクルズ皇帝の誕生日だ』

ゼロ『この町には3000人しか人が住んで無いんだよな』

クク『昔は60億人ほど人が住んでいたんだが、ある時から戦いを好む』

人間達が現れて殺しあつて人口を削りあつたのだ』

ゼロ『自分は歴史に疎いのでよく知らないがそんなことがあつたんですね』

クク『世界は人が少なくなる変わりに環境が変わりつつある』

ゼロ『地球の意思ですね』

リリー『隊長!』

ゼロ『なんだ?』

リリー『お祭りに行きましょう』

ゼロ『今は仕事なんだ。ジャックと行けよ』

リリー『ブー』

ジャック『俺も仕事あるからさ、一人で行けよな』

リリー『ブー』

クク『ああ、そういえばお前に新しい指令が来ているぞ』

ゼロ『どんな任務です』

クク『隣国のお姫様を護衛する任務だ。隣国といっても海を挟んでだがな』

国の名前はファシーナ。小さな国だ。そこは小さな国が大変裕福な国でな』

周りの国に付け入れられそうなのだ』

ゼロ『いつからです』

クク『明日だ』

リリー『私達も一緒に』

ゼロ『駄目だ。付いてくるな』

俺も同じ鉄は踏まない次は一人で何とかする

つまらないプライドを胸に俺はファシーナへ向かう

- ファシーナ -

ゼロ『ここがファシーナ…』

衛兵『お待ちしていました。ゼロ殿』

ゼロ『上に通してくれ』

- 訓練所 -

セレント『誰か、このセレントの相手になるものはいないか』

ゼロ『あれが一番強い奴か』

セレント『ええい、なんだこの体たらくは…!』

ゼロ『あんなつたない奴がか』

衛兵『ゼロ様、こちらでございます』

- 謁見の間 -

レイ女王『それで、ナックからの増援というのはこのものか?』

大臣『た、たつた一人なのか?』

レイ女王『口を慎みなさい、それでゼロ訓練所はどうでしたか?』

ゼロ『今まで平和だったってことがよくわかりました』

ざわざわ…

レイ女王『確かにわが国は今まで富のみにすぐれていて力という点では

他の国に引けを取っていました』

レイ女王『しかし、今日まで一切の争いごとをせず平和に暮らしてきたのです』

ゼロ『過去の栄光を語るより今しなければいけないことをしましよ
う』

レイ女王『例えばどんな事ですか？』

ゼロ『兵士達には剣の技を、国民には魔法を』

レイ女王『国民にも戦わせるのですか？』

ゼロ『敵は数でこちらを圧倒しているのです。そうでもしなければ
我々に勝ち目はありません』

その時謁見の間にドタドタと足音かなる

セレント『女王様。このたびの助っ人はこの…』

ゼロ『ゼロ・パークテイだ。君の腕はさきほど測らせてもらったよ』

セレント『修練所を覗いておったか。ゼロとやら。人の力量とは
そう簡単に計れるものではない。それにな…』

ゼロ『女王よ、先ほどの話だが、兵士達より国民達に魔法を教えた
い』

セレント『ゼロとやら、私と一戦交えてみないか？』

ゼロ『そんな時間は』

レイ女王『構いません。この者がただものではないと信じてみたい
からな』

ゼロ『仕方ありません』

セレント『いくぞー!!』

ゼロ HP 5000

セレント HP 測定不能

MA 150

MP 測定不能

ゼロ『ムーンショットを開くまでも無い』

ゼロの攻撃

セレントに1200のダメージ

セレント『そんなものかー!!』

セレントの攻撃

ゼロに5000のダメージ

ゼロ『馬鹿な！！さっきとはまるで別人だ』

セレント『あれは兄だ』

ゼロ『そうか…無礼だったな』

ゼロ『ムーンショット全快』

ゼロの能力が上がっていく

ゼロ HP 15000

セレント(本性) HP

16000

MA 2500

MP

2600

90

ゼロの攻撃 奥義だ！！

炎よ 2000ダメージ

氷 1000ダメージ

大地の怒り 1000ダメージ

風の嘆き 1000ダメージ

後に残るのは闇だけ

7000ダメージ

セレントの攻撃

酔無精！！

ゼロに5000のダメージ

ゼロHP10000

MA2000

セレント HP9000

MP2200

ゼロの攻撃 奥義

月滅浸透剣!!

カウンター!!セレントの攻撃

風鈴車!!ゼロに8000のダメージ

ゼロは攻撃を跳ね返した

半分が跳ね返る

セレントに8000のダメージ

ゼロHP2000

MA1500

セレント

HP1000
MP1800

セレントが先制を取った。

風鈴車!!

ゼロはすべての攻撃を跳ね返す

セレントに8000のダメージ

セレント『かはっ!!み、じとです』

ゼロ『大丈夫か?』

レイ女王『セレントの弟のほうは病気なんだ。だから兄があんな道化のような事を』

セレント『兄弟にはそれぞれの役割があるんだ。女王様もそんなに気を使ってくれなくとも』

戦いに勝ったがセレント兄弟にはなんとなく負けたような気がした
パークティであった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8053h/>

月滅剣

2010年11月8日09時24分発行